

平成30年 春の叙勲 褒章



瑞宝双光章

消防功労 元 高知県高幡消防組合 四万十消防団団長
 地方自治功労 元 高知県四万十町議会議員
 たけうち つねき
竹内 常喜(戸川・70歳)

竹内さんは、昭和53年に十川分団に入団し、平成26年に退団するまで37年間の長きにわたり、地域の安全・防災に尽力。また、平成9年に十和村議会議員に当選以来、5期20年間議員として在職し合併協議会委員を務め、平成18年の四万十町誕生にも携われました。今回2つの功績を称えられ、受章となりました。

東日本大震災から半年後、大津波で多くの児童・教員が犠牲となった石巻市立大川小学校を消防団員として訪れた経験は、四万十町にとっても震災は他人ごとではないと防災への意識がより一層高まり、その後の議員活動にも大きな影響を与えたそうです。

今後は長年自分を支え、家や製材所を守ってきてくれた奥様のために、奥様孝行をしたいと話していました。



藍綬褒章

更生保護功績
 現 保護司
 はやし ただし
林 只(大井川・76歳)

林さんは、平成6年11月からの24年間「保護司」という法務省からの委嘱を受けた民間ボランティアとして、人の立ち直り・社会復帰を支える活動に尽力された功績が称えられ今回受章されました。中学校を卒業後、黒石にあった旧帰全農場で農業を学び、現在も米を中心に、胃の薬や整髪料にも使われる「センブリ」という薬草の栽培など農業を営まれています。

先輩の後任として保護司を始めましたが、当初は何もわからず、また天候に左右され時間を作ることの難しい農業の傍ら、経験しながら徐々に覚えなければならぬ苦労もありました。奥様の支えがあってこそ、現在まで続けられたそうです。保護司として面接する時は、リラックスして会話できるような心掛けていたという林さん。大好きな山に登ったり、飛行機の本を読むなどして過ごすのが楽しみだそうです。今回の受章については農作業中、携帯電話に保護観察所からの連絡で、「大変驚きました」と話していました。

四万十町からコメ新品種

種苗法による品種登録が6月19日付で告示(農林水産省告示)され、株式会社四万十米クラブの新品種「^{めた}ソノ川1号」が誕生しました。

15年前から米作りの研究をはじめ、土壌分析や肥料の研究開発などを重ね、エコ栽培に取り組み、2008年にエコファーマーの認定を受け、品種登録を目指し試験栽培を開始。関係機関との勉強会や県外視察研修を実施し、試験栽培から6年間の実績を重ね2013年に品種登録出願申請書を農林水産省に提出。5年の期間を経て、念願の品種登録がされました。

「ソノ川1号」は甘みとほのかな香りが特徴で、「^{かみ}神の香」の商標で流通しています。

民間企業が申請した稲種での品種登録は県内初となっており、新品種の育成者である下元利文さんと南部隆男さんは、「長年の苦労が実った。日本一おいしい米にして、この新品種で四万十町を全国に発信していきたい」と意気込んでいます。今後イベントなどを通じ、広く認知度を高め、仁井田米ブランドの更なる発展と拡大につながるよう期待しています。



▲南部隆男さんと下元利文さん

季節の風景 8月 無花果 いちじく



8月から10月にかけて旬を迎えるいちじくは、漢字で「無花果」と書きますが、花がないわけではなく、果実を半分に切ると赤いつぶつぶがたくさん詰まっています。それが花です。いちじくは花の部分によって独特の食感を生み出しているのです。

はるか昔、アラビア半島で誕生したいちじくは、少なくとも6千年前には、栽培が始まっていたといわれています。旧約聖書で、アダムとイブが裸を隠すのに使ったのもいちじくの葉っぱです。そして、その後、ヨーロッパからペルシャ、中国へと伝わり、日本へは江戸時代に中国から長崎に運ばれました。当初は薬用として栽培されていましたが、生産量が増えるにつれて親しまれるようになったのです。現在、国内で販売されるいちじくの約8割が「榊井(ますい)ドールフィン」という品種で、こちらは、明治42年に広島県の榊井光次郎氏がアメリカから持ち帰ったもので、栽培のしやすさから全国に広まったのです。

少年が跳ねては減らす無花果よ 高柳重信

今月の 人オポソリ

確かな学問と知識に裏付けられた 流域への思い



はかた ゆき
羽方 優紀さん
 (四万十川財団職員/須崎市在住)

四万十町に拠点を置き、四万十川の保全と流域の振興を目的として活動する公益財団法人・四万十川財団。この財団のニューフェイス、羽方優紀さん。

羽方さんは、須崎市出身の23歳。高知大学人文学部・人間文化学科を卒業して、この春、財団のメンバーの一人となりました。

羽方さんは、大学進学前は心理学に興味があったこともあり、人文学部を選択しました。二年生の時に、地域活性化に関係する授業を受けたことで、羽方さんの興味は、地域活性化へと向かっていくことになりました。そして、さらに地域活性化の研究を絞り込んでいくために、地域変動論コースの中から、人文地理学を学びました。人文地理学とは、簡単に言うと、人間の文化や社会、歴史、経済、環境を対象とした、地域的特徴や、地域間の違いなどを研究する学問です。

卒業論文では「四万十川流域の農家民宿について」をテーマとして、主に西土佐周辺を調査、研究しました。

四万十川財団で活動するようになって驚いたことがあります。心理学的に興味があったこともあり、人文学部を選択しました。二年生の時に、地域活性化に関係する授業を受けたことで、羽方さんの興味は、地域活性化へと向かっていくことになりました。そして、さらに地域活性化の研究を絞り込んでいくために、地域変動論コースの中から、人文地理学を学びました。人文地理学とは、簡単に言うと、人間の文化や社会、歴史、経済、環境を対象とした、地域的特徴や、地域間の違いなどを研究する学問です。

卒業論文では「四万十川流域の農家民宿について」をテーマとして、主に西土佐周辺を調査、研究しました。

四万十川財団で活動するようになって驚いたことがあります。



▲外に出ることも多いのですが、この日はオフィスワーク!

「四万十川流域には、実にたくさんの方が関わっています。川に存在していること、川の保全、改善に取り組む人々、流域社会を盛り上げようと頑張る人々が、こんなにいるなんて!」

今後の活動の抱負も聞いてみました。「四万十川流域にもっともっと深く関わってきたいです。新しく学ぶこともたくさんあると思うので、どんどん学んでいきたいし、これまで自分が勉強してきたことをどんどん生かしていきたいと思います」と羽方さん。まだ財団職員1年生ですが、確かな学問と知識に裏付けられた流域への思いや、地域活性化への思いは、すでに即戦力!!